



山伏に身をやつして「安宅の関」を越えようとする義経(左)・弁慶(中)とそれを見とがめる関守の富樫(右)。

第1回
石川県小松市
全国子供歌舞伎
フェスティバル



今回紹介するのは石川県小松市の「全国子供歌舞伎フェスティバル」。小松市内の学校からたくさん子どもが参加して「勸進帳」を演じるこのイベントで、第1回から振付(監督のこと)を務める元小学校校長の北野勝彦さんに取材してきました。

ご当地
日本全国
小学校
行事紹介



伝統を受け継いで

「全国子供歌舞伎フェスティバル」を始めた時期やきっかけを教えてください。

もともと小松市には「子供歌舞伎フェスティバル」を始める以前から、お祭りの曳山(ひきやま)山車(だし)で子どもが歌舞伎を演じる「曳山子供歌舞伎」という行事が江戸時代からの伝統として続いていました。また、小松市は歌舞伎「勸進帳」の舞台「安宅の関」もあるということ、歌舞伎との縁も深い場所です。それらを踏まえて、歌舞伎の街・小松市を全国に発信するべく、平成10年からこの「全国子供歌舞伎フェスティバル」を毎年開催するようになりました。小松市だけでなく、全国に伝わる「子供歌舞伎」を紹介するために、毎年2団体をお招きして公演していただいています。

出演する子どもたちはどうやって決めているのですか。

役者を務める子どもたちは毎年10月中旬〜11月下旬にかけて、小松市内の小学校で4〜6年生を対象に公募しています。そして12月中旬にオーディションを行っています。

オーディションではどのようなことをするのでしょうか。

ラジオ体操によって体の動きを、朗読



によって声の張りをみます。そして最後に面接をして子どもたちの意気込みなどをみます。その後、毎年5月の初週の土日の公演に向けて1〜3月は市役所で稽古を積んでいます。そして4月になったら学校の舞台で、5月の講演直前になったら会場のごまつ芸術劇場うららでりホールをします。





富樫に勤められる酒を弁慶が飲み干す場面。

経験子どもたちの財産に

——稽古の様子について教えてください

まず、舞台上立つのは少人数なので



一人の負担は大きいと思います。それでいて稽古ができるのは放課後などのわずかな時間しかありません。そのため、どうしても稽古はとても辛いものになってしまう、たいいてい子どもたちが泣いてしまいます。しかし、そのたびに子どもたちは強くなっていきます。あまり厳しいことを子どもたちにやらせない時代だからこそ、このような体験はきつと子どもたちの財産になるだろうと思います。

——「稽古は辛い」とのことですが、やはり台詞を覚えるのが難しいのでしょうか。

台詞を覚えること自体は実はそれほど難しくありません。それよりも覚えた台詞の喋り方や身のこなしなどが子どもたちにとっては大きな課題となります。例えば、歌舞伎の台詞のイントネーションはいわゆる江戸弁で、小松市のイントネーションとはだいぶ異なります。そう



した部分というのはなかなか身につけにくいように思えます。

——稽古中に心がけていることはありますか。

稽古中の声かけはとても大切ですが、「どうしてできないんだ」という叱責はもちろん、「がんばれ」という励ましも、「大丈夫？」という問いかけもよくないと考えています。子どもたちは既になんばっているし、問いかけは彼らのことを分かっていることになるからです。そうした声かけをするよりも、子どもたちがきちんとできたときに「よくがんばっ



稽古に励む子どもたち。中央は北野勝彦さん。

たね」と努力を認めてあげることがいちばんの励みとなるのではないかと思います。それを意識して指導しています。

また、「国際化」がさげられる現代ですが、そもそも子どもたちは日本の伝統芸能や文化に触れる機会があまりありません。この公演を通して地域の伝統文化に触れた子どもたちが、郷土愛と強い精神力を育み、地域や自国の魅力をきちんと知り、外国の方に紹介できるようにすることが本場の国際化への道だとも思っています。

弁慶の「勸進帳」とは

源頼朝に追われる源義経らが奥州へ逃げるために安宅の関に辿りついた場面を描く演目で、歌舞伎の代表作の一つです。義経たちは武蔵坊弁慶を先頭に山伏の姿で通り抜けようとしていますが、義経一行が山伏に変装していることを知っていた関守の富樫左衛門に見とがめられ、関所を越えることを許されません。それに対して弁慶は、焼失した東大寺再建のための勸進を行っていると行って、たまたま持っていた巻物を勸進帳であるかのように装って読み上げ、本当の山伏であることを証明しようとしています。この場面から「勸進帳」という題名がつけられました。

